

地域住民との地域活性化コミュニケーションのメカニズム

1240488 根木 紗葵

指導教員 那須清吾

研究背景

近年、地域活性化という言葉を目にする機会が増えてきた。地域住民が望む地域活性化を行うためには地域住民と主催者の間でどのようなコミュニケーションをとればよいのかということは明らかにされていない。本研究では実際に地域活性化を行っている主催者にインタビュー調査を行い、比較分析を行うことで地域住民との地域活性化コミュニケーションのメカニズムを明らかにしていく。

研究目的

本研究では、地域住民と地域活性化の主催者との間でお互いの相違が埋まらないメカニズムをコミュニケーションの視点から解明していく。

研究方法

本研究では地域住民との地域活性化コミュニケーションのメカニズムを調査する。そのため以下の順序に沿って研究を行う。

1. 先行研究の調査
2. 研究全体のモデル作成
3. インタビュー調査
4. 仮説
5. インタビュー調査結果を研究モデルに当てはめ比較分析
6. 考察
7. 今後の課題

分析結果

いの町の事例を基にした比較分析の結果、主催者と地元住民のコミュニケーションには6パターン存在した。主催者が地域住民であっても地域外の方であってもミスマッチは発生する。しかし、事例を比較分析しパターン化したことで地元ネタであれば歴史的フィルターを通過し地元住民の当たり前という変数が発生するなどミスマッチが起こる原因を解明することができた。

考察・結論

地域外の方が行う地域活性化の内容が地元ネタであると地元住民がエンコーディングする際のフィルターは必ず歴史的フィルターを通過する。この仕組みを理解しておけば地域住民に根付いている当たり前という変数を見抜くことができミスマッチを防ぐことができる。この変数を見抜かず一度ミスマッチを起こしてしまっても学習効果が生まれるため次のミスマッチを地域外の方でも防ぐことができる。さらに、一般的なネタであるとエンコーディングした内容にフィルターと変数の影響がなければ、お互いの目的の価値観を一致させることができる。つまり地元住民が主催者だからといって目的の価値観が一致しなければミスマッチが発生してしまう。このコミュニケーションモデルを活用していくことで地域住民が望む地域活性化を行うことができる。しかし、今回の研究ではいの町を対象とした比較分析しか行うことができなかった。そこで他の地域でも6つのパターンになるのかを検証していく必要があり、違う地域の地域活性化の事例になればパターンが増え、より確実性のある比較分析を行うことができるため今後も調査していく必要がある。